Rain Story

刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒａｉｎ　Ｓｔｏｒｙ

【Ｎコード】
Ｎ６４８２Ｍ

【作者名】
刹那

【あらすじ】
雨の降る日に出会った女の子との会話です
特に記載するようなことはないです。
ただ、楽しんで読んでいただけたらと思います。

では。

プロローグ（前書き）

拙い文章ですが…気にせず読んでいただけたらうれしいです。

プロローグ

ここにはいつも君が居た。
僕は君とここで出会った。
あの日は雨が降っていたっけ。
雨宿りしに来たら先客が居て……。
「ねえ、君も傘忘れたの？」
そんなふうに話しかけてきたんだよね。
「うん、突然の雨だからね。持っている人のほうが珍しいんじゃないかな」
僕もちゃんと返事をした。
僕達が話をしている間は雨が激しくなる一方だった。
しかし、帰ろうと言い出した頃には雨はすっかり止み、空は夕焼けの色に染まっていた。
「そろそろ帰らないと…。雨も止んだしね」
そういえば名前も何も聞いてなかった。
「君の名前は？」
「そういうのは自分から言うものじゃないのかな？」
悪戯な笑顔で君はそう言った。
「ま、いいけどね。私は橘咲乃（たちばなさくの）。覚えといてね」
そう言って歩き出す。
「あ……ちょっ…僕の名前は…」
「また会えたらその時に教えてよー」
なんとも勝手な女の子だった。
この雨の日から何日も経ったまた雨の降る日、僕は無事に名前を教えることになった。
そんな雨の日にしか進んでいかない関係だった。

太陽燦々、気分は上々？（前書き）

更新です！
下手なりにがんばったので読んでやってください！

太陽燦々、気分は上々？

朝。
それは一つの拷問だと僕は考える。
起きたくない。なぜ眠いのに起きなければならないのだ。
人間無理はいけないのだ。そう思ったその時、
「えーい☆」
可愛い声と共に悪魔のような一撃。
「げふっ…」
それもお腹に。
「あらら、綺麗に入っちゃった…。おーい、生きてるかい？」
この声はそう、一人しかいない！
「……おはようございます。咲乃さん……」
というよりどうやって入ってきたのだろうか？
気になったので聞いてみることにした。
「咲乃さん、どうやって入ってきたの？」
首を傾げて言うには、
「え？窓の縁を掴んでよじ登ってきたけど？」
あっさりと返ってきた。
「いや…さも当たり前のように言われても……」
なんせ不法侵入である。犯罪だ。
「暇なんだ」
……？はい？
不思議そうな顔をしているともう一度言われた。
「だから…暇なの」
「うん。それは分かった。でも僕に言われてもどうしようもないんだよね」
咲乃さんがみるみるうちに般若に大変身！
「普通さあ……女の子が暇って言ったらどっか行く？とかさここ行

ってみない？とか聞くもんでしょうがっ！」
「じゃあ、今日学校で補習あるから行こうか」
僕がもともと行く予定だったスケジュールに誘ってみた。
「わーい！補習ね！私行ってみたかったんだーー。……「そう？良かった…」なんて言うとでも思ったかあ！このバカ！違うだろっ！女の子誘うのは良いけど場所の選択違うだろ！あんたは彼女とデートするとき補習行こうか？って言うのか！？「いや、咲乃さん彼女じゃないし……」わかってるわそんなこと！
なんだ、うん？馬鹿にしてんのか？そうか、馬鹿にしてるし頭悪いと思ったから補習いこうって言ったんだな！？そうだろ？なんなら勝負するか？私が負けたら補習行ってやる！だけどな…あんたが負けたらどっか遊びにつれてってよね！」
さあ、めんどくさくなっちゃったな……。
最初から遊びに行こうって言えば良かったのに。
ということで……
成績を見せ合うことに。
「……おかしい」
「何が？」
「なんでいつもボケッとしてるあんたのほうが成績上なのよ！」
確かにぼけーっとしてる。それは認めよう。だが…。
「ノートもちゃんと取ってるし予習復習もしてるよ？」
あいた口がふさがらない、とはこれだなと良く分かった瞬間だった。

結局、予習には行かなかった。
正しく言うと行かせてもらえなかった。
なぜなら折角咲乃さんが来てくれたのだ。
遊びに行かない手はない。

「で、何処に行きますか？」
「いつもどこら辺行ったりしてんのさ」
いつも行く場所……。

「スーパー？」
しばらくの沈黙。そして……。
「スーパーかあ。色々置いてあるし涼しいから一石二鳥！」
良かった。喜んでるみた……
「なんて言うかぁっーーーーー！！」
「えええええええええええええええっ！？」
あれぇ？
「なんで遊びに行くのにスーパーよ！普通もっと行くとこあるでしょ！？ねえ！」
いつも行く場所行ってと言われたから来たのに……。
「まだ行く所残ってるの？」
行く所……。あそこが残ってるか…。
「一応」
「次変な所行ったら怒るからね！」
理不尽だ。

ついた場所は……。
「図書館？」
「うん。図書館」
咲乃さんは拳を作って殴ろうとしてきた。
「待って！ただの図書館じゃないんだよここは」
「へえ～。じゃあどんな図書館か、教えてもらおうじゃないの」
そうして僕達は図書館へと入っていった。
「ここはね、皆があまり使わないところなんだ。そんな所になぜ僕

は来るのかっていうとね、たくさん本があるし、近いし、冬は暖かくて夏は涼しい。あともう一つ。此処に来る理由があるんだ」
「……もう一つってなんなのよ？」
「まだ教えることはできない。それはすごく良いことだから」
咲乃さんは首を傾げて悩んでいた。
「とりあえずたくさん本があるから読んでいようよ」
ということで今日は図書館で過ごすことになった。

空が夕日に染まりはじめてから三十分あたり。
「そろそろだね」
その瞬間はもうすぐやってくる。
咲乃さんを呼びに行かなければ。
「咲乃さん、ちょっと屋上まで行こうよ」
そう話しかけると付いて来てくれた。
長い階段をあがり屋上へと出る。
「わあ……。綺麗！」
空は夕日に染まり淡い赤になっていた。
「まだだよ。夕日が沈むとき、もっと綺麗になるから」
そう。こんなものではないのだ。
初めて来た時に見つけたこの綺麗な空。
「始まるよ……」
来た……。
「何これ……。こんな景色見たこと無い！」
その景色は少し暗くなった世界と赤い綺麗な世界の重なり。
もうずっと変わらない。何年もこのままだ。
僕らはしばらく眺めていた。

「今日はありがとね。わがままに付き合ってくれてさ」
「咲乃さんが楽しかったんならいいよ。というか、自覚あったんだ？」
とても満足そうな顔をしていた。
おそらく僕もそうなのだろう。顔が笑っているように感じる。
「よし！特別に咲乃って呼んで良いよ！そのかわり……」
何を言われるのだろうか。
「また連れてってね！約束！」
よく晴れたこの日僕は久しぶりに指きりの約束をした。

太陽燦々、気分は上々？（後書き）

更新遅れてすみません。
というより待っている人いるのかな？
……待ってます！（読んでくれる方！）
良かったら感想でも送ってやってください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6482m/

Rain Story

2010年10月8日12時21分発行